

毛鉤の愚痴が聞こえる溪

★京都府 京北 美山川
☆河内谷

新緑の木立の下で木漏れ日を受けながら瀬尻にたたずむ・・・

連続ヒットの余韻もあって、いつもの様な気負いもなく、おもむろに瀬頭にキャストした。

「ふわり」と落ちたライトケイヒルは反転流に乗って落ち込みの間に漂った後、「くるり」と一回転して流芯に滑り出され、ゆっくりと底石の多い瀬を漂いながら川下りを始めた直後、飛沫と共に姿を消した。

「よっしゃあゝ・・・!」・・・程なく、ライトケイヒルが小太りのあまごを連れて来た。

鉤を外してあまごを開放すると・・・

「**もつさきからチョロチョロしすぎやー!**」とライトケイヒルが訴える。・・・

「もう一匹ぐらいいけるやろ・・・」・・・と無理やりフライリストに押し込み、ひとしきりシヤカシヤカやって、今度は反対側へとプレゼン・・・既に2匹のあまごを連れて来ているライトケイヒルは嫌々ながらもへなへなと飛んで、岩にぶつかり弛みに落ちた。

あたりは静寂に包まれた溪・・・

何処からともなく、あの時の餌釣師の声が聞こえた様な気がした。

「・・・もっと、溪と対話せんと釣れへんわ・・・」

この溪に始めて来たとき、当然サッパリ釣れない・・・橋の上から川を覗き込んでいると、誰も居ないはずの瀬尻からいきなり怒鳴られた。

「おい!・・・さつきからチョロチョロしすぎや!・・・ワシここで釣っとんねん!」

いくらなんでも先行者優先のルールぐらいは弁えていたつもりだが、さつきからこのあたりの上流、下流を車で رفتり来たり、東播の野池でバスを釣る様に車の機動力を活かしてあっちの深瀬、こっちの淵・・・ルアーならば正解かも知れないが、落ち着きがない釣り方で釣りの存在など気にも留めていなかったのは事実である。私が悪い。

「スンマセン!」と手を立てて拝む様に謝り、もつと下流に行こうと車に戻る事にした。

すると、川からさつきの餌釣師が上がってきた・・・(やバァ・・・嫌味言いよるやろなあ)と思うまもなく・・・

「さつきは怒鳴って悪かったなゝ・・・釣れたか?」・・・と笑顔で話しかけてくれた。年は私より一回り以上は年配の餌釣師だった。

この先の会話は今でははっきり思い出せないが、この餌釣師の話を聞いてその後の釣りが変わったことは事実だ。

「自分なあゝ・・・もっと、溪と対話せんと釣れへんわ・・・」と言う話から始まり・・・私の釣り方を否定はしないが、「溪流に住む魚」を釣るなら・・・溪に入ったら謙虚な気持ちで、よく回りを見て、釣り人がおらんかも確認して、3時間は車に戻らず、溪に腰すえてじっくり釣り上がったら絶対に魚の気配を感じるし、そのうち釣れる・・・腕より前にこの心持が大切・・・と言う様な貴重なアドバイスだった。

この日は「落ち着きのないヘタッピ」のレッシュを貼られて悶々として溪を後にした。

翌週ここを訪れて、教えられたとおり車を止めてひたすら叩いて上がった。すると、ライズが見える・・・ハッチが見える・・・そして、あまごが釣れた。

餌釣りの経験がない私には非常に有意義な出会だった。

・・・なんて事を思い出していると、嫌々ながらも飛んで行ったライトケイヒルが見当たらない。

「?・・・何処行きよってん?」・・・とロッドを立てると、心地よい魚信・・・さすがはナンパの

名手ライトケイヒル・・・3匹目のあまごを連れて来た。

またまた鉤を外してあまごを開放・・・すると、ライトケイヒルが怒ってる。

「ボォ〜としてんと、早よ上げんかあ〜！何処見取んねん！・・・危うく、吐き出されるところやったわ！・・・」

「スマンスマン・・・と私がなだめると・・・
「ワシ、3匹連れて来たさかい・・・もあ〜エエやろ！・・・ボチボチ交替させろや！・・・フライパッチで休ませんかい！・・・」と名選手の愚痴は納まらない。

「ハイハイ・・・苦勞お〜さん・・・」とティペットをカットして選手交替・・・
（今日は何でも釣れるうちゅうねん・・・）
と言う思いが湧くと、いつもながらに出来損ないの毛鉤に手が伸びて三流選手在庫一掃クリアランスセールが開催される。

取り出されたのは、何時も敬遠されて劣等感の塊、出来損ないのクイ（※）ル・ゴードン・・・
予期せぬ起用に嬉しさを隠せない・・・

「使って頂けるんですかあ？」・・・と、俄然やる気のクイ（※）ル・ゴードン・・・

「今日は結構喰いが立ってるさかい・・・お前でも大丈夫や・・・！」・・・とアイにティペットを通した。

すると、フライパッチのライトケイヒルがま

たまた愚痴をこぼしてる。

「おい！・・・こら！・・・ワシなんやてん！・・・教稼ぎかい？・・・」・・・と愚痴まくってるライトケイヒルに・・・

「まあ、ええがな・・・」・・・とだめていた。

この溪に入ると、いつもあの餌釣師の事を思い出してしまう。今では還暦を迎えられてるかもしれない。未だどこかの溪で竿を出しておられるだろうか？・・・

私の方は、あの時教えて頂いた「溪との対話」を始めてから溪魚が釣れる様になりました。

そして「溪との対話」繰り返すうちに・・・とうとう毛鉤の愚痴まで聞こえる様な気がしております。あの時はありがと〜ございました。

■美山川河内谷の「案内」

最初に訪れたのは、ここが特別区になった頃で、魚券を売るおばさんが「知らん顔して入らる人がいはるんえ・・・どんならしまへん・・・」と嘆いておられたが、あれから20年程立っても、この管理人さんは軽トラパトロールに余念がない。

ここも佐々里同様、猫柳が激減した。林道も最初は地道であったと記憶するが、今では舗装路で乗用車でも上流まで詰めることが出来る。

その分、車を止めて道から竿も出せる様になり、川の変化と共に客質もかなり変わり、もはや「溪との対話」説く様な釣師の方は余りお見受けせず、クーラーボックスを下げた玉浮き釣師も押しかける。フライフィッシャーも佐々里がC&Rになった事で殆ど見かけなくなった。

しかし、この様な状況でも、この溪はかなり懐深く、魚影の濃さは管理人さんがパトロールするだけのことはあり、折り紙つき（但し、成魚放流）で毛鉤はなんでもよく、簡単に「つ抜け」が達成できるであろう。

但し、6月の声を聞くと、こんな状況では魚は残らず新緑の时期的イベントなのは言うまでもない。

最も重要なのは、放流は奥手柳谷合流点上手にある堰堤から下である。余り上流に詰め過ぎると放流の恩恵を授けられない。

管理人さんも堰堤より上で竿を出していると

「ここは放流してないからおらんぞー」と忠告してくれる。確かに堰堤より直ぐ上はダメだ。

しかし、もう少し上がり御所ノ谷が流れ込む辺りは・・・天然のヤマメが人知れず息づいている。美山川のヤマメは演習林は知らないが、佐々里や櫃倉谷でお目にかかれる。しかし、確率としては圧倒的にここが堅いと言えるだろう。今の所は・・・

2006年 11月